

---

# 鳴りやまぬ鐘を聴きながら

早川みつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鳴りやまぬ鐘を聴きながら

### 【Zコード】

Z0199V

### 【作者名】

早川みつき

### 【あらすじ】

フランツの心の恋人・エレナは継母や姉たちから使用人のように扱われ、つらい毎日を送っている。城でお妃選びの舞踏会が開かれるとなれば、フランツはエレナを舞踏会に行かせようと決心する。王子はエレナの初恋の相手だ。エレナの幸せのためなら、命だつて惜しくはない。フランツは魔女に会い、ある取引をするが……。

シンデレラの物語を下敷きにしたファンタジーです。気軽にお楽しみください。

## (前書き)

フランスの心の恋人・エレナは継母や姉たちから使用人のように扱われ、つらい毎日を送っている。城でお妃選びの舞踏会が開かれると聞き、フランスはエレナを舞踏会に行かせようと決心する。王子はエレナの初恋の相手だ。エレナの幸せのためなら、命だつて惜しくはない。フランスは魔女に会い、ある取引をするが……。

シンデレラの物語を下敷きにしたファンタジーです。気軽にお楽しみください。

「聞いたかい！？ 城でお妃選びの舞踏会が開かれるんだよ！」

帰宅した女主人が、居間に入るなり興奮した口調でいった。

「ええっ！？ いつ、いつなの！？」

長女が鼻息も荒くたずねる。

「次の土曜の晩さ。集まつた国中の貴族の娘の中から妃を決めるんだ」

「といつことは、わたしにもチャンスが！」

次女がうつとりした目つきになつた。

「なにいつてんの、お妃になるのはあたしよ。あんたみたいなデブ、およびじやないわ」

「姉さんこそ、その馬ヅラじや永久に無理だわよ」

『『あんたたちがお妃になれる可能性なんて、容姿は別にしてもゼロ以下だぜ』』

おれはキャビネットの影で悪態をつく。

「ねえお母さま、ドレスは最新流行のでなきゃダメよ。他の娘より目立たなきや！」

長女が甘えた声で母親にすりよると、  
「あたりまえだよ。そのためにほり、パリから着いたばかりの生地を買つてきたのさ」

母親は誇らしげに色とりどりの生地をテーブルに広げた。

「すてきー。これがあたしにー？」

次女がいちばんかわいいピンクのレースをとりあげてからだに巻きつけ、  
しなをつくる。おれは目をおおつた。デブにピンクは似合わないぜ、  
身の程を知れ！

「でも、灰かぶりが縫うんでしょう？ 生地が汚れたら困るわ」

「街の仕立屋なんかに頼んだら、一週間でできあがるもんかね」と母親。

「あの娘には部屋と食事をやってるんだ。せいぜい働いてもいいわ。死ぬまでね！」

「にくしげにいつ母親に、姉妹は「当然よね！」といつてうなずきあつた。

まったく、腹がたつたらありやしない。おれは大きく息を吸いこむと、向かいの壁の穴めがけて全速力でダッシュした。

「きやーつ！ ねね、ね、ネズミつ！」

そう。おれはこの館のれつきとした同居人なのだが、なぜかみんなから毛嫌いされている。もちろん、おれだって人間は大嫌いだ。……たつたひとりを除いて。

\* \* \*

台所の穴から顔を出すと、ぼろぼろの靴が目に入った。爪先にぽつかりあいた穴から、しもやけだらけの指がのぞいている。

『エレナ』

呼ぶと、少女がこちらに顔を向けた。

「フランツ！」

色白の顔に、あたたかい、おひさまみたいな笑みが広がった。「ごめんね、いま料理してるから相手をしてあげられないのよ」むきかけのじゃがいもをいつたんテーブルの上におき、エレナはしゃがみこんだ。深い藍色の瞳に間近から見つめられて、おれはがらにもなく赤くなる。

『エレナ、おれ……』

おれはエレナが好きだ。でも彼女にとつておれは、ただのちっぽけなネズミにすぎない。いくら話しかけても、エレナの耳におれの声はネズミの鳴き声としか聞こえない。

「しつつ！ 猫に見つかったらたいへんよ。それでなくともあなた、

田立つんだから

おれの毛皮は、ふつつのネズミとは違つて銀色だ。そのせいでも  
く猫にも狙われる。

「そうそう、いいものあげるわ

エレナは立ちあがつて戸棚からチーズの塊を取り出し、薄くそい  
でおれに差し出した。おれが両手でうけとると、エレナは満足そつ  
にうなずき、再びじやがいもの皮をむきはじめた。

台所は暖かいから好きなの、とエレナはいう。石造りの館の冬は、  
芯から冷える。ときおり彼女は、夜、煮炊きの終わった調理場のか  
まどの灰の上にすわって暖をとる。それを「灰かぶり」といって、  
あの底意地の悪い姉たちは笑うんだ。

エレナは男爵がめかけに産ませた子で、小さいころ母親が死んだ  
ためにこの館にひきとられたといつ。器量のよいエレナをうらやん  
で、継母と姉たちは彼女をいじめた。彼女をかわいがつていた男爵  
が亡くなつてからは、使用人同然の扱いだ。

「灰かぶり、仕事だよ！」

扉が開き、継母のとがつた声が響いた。

「これから娘たちのドレスを縫うんだよ」

「ドレスを？」

エレナの顔がぱつと明るくなる。華やかな服を縫うのは、彼女が  
いちばん好きな仕事なんだ。……それが自分のドレスではなくても。  
「土曜の晩の舞踏会で着るんだ。集まつた娘たちのなかから、王子  
がお妃を選ぶんだよ」

そのことばに、一瞬エレナの瞳が輝く。と、即座に母親の平手が  
飛んだ。

パン、と乾いた音。

エレナはほおをおさえつづむき、「ごめんなさい、お母さま」  
と小声でいった。

「……この娼婦の娘が。忘れるんじゃないよ、あんたは好意でこの  
館においてやつてるんだからね！」

\*

\*

憎しみがどれほど人間を変えるのか、おれにはよくわからないけれど。館の使用人たちが、「奥さまも以前はあんなじやなかつた」というのをきいたことがある。

おれは館の北側のすみにあるHレナの部屋に向かつた。

冬でも火の氣のない、冷たい部屋の中央にエレナが立つていた。るうそくの光を受けた白い顔には、なぜかおだやかな笑みがあつた。ピンクのレースを肩からかけ、きどつたしげさでそのままをつまみあげると、Hレナは貴婦人のように深く膝を折つて礼をする。そして、ゆるりとステップを踏みだした。

低くくちずきむのはワルツのメロディー。くるりと回ると、ふわり、レースの端がひるがえる。優雅に、すべる」とへ、彼女は舞つた。

「あら、フランシ」

おれに気がついて、Hレナはさつと顔を赤らめた。踊りをやめ、肩からレースをはずす。

「……ばかよね、こんなことして」

自嘲的なつぶやき。だが瞳には失意が色濃くにじんでいる。エレナ、そんなに舞踏会に行きたいのか？

「小さじこひ、伯爵の舞踏会で王太子さまとお会いしたことあるのよ」

なつかしそうに手を細め、Hレナはいった。

「あちらも子どもだつたけれど、すてきな方だつたわ。わたしの初恋だつた」

くすつと笑つ。

「でも舞踏会はとっても退屈だつたのー。だからわたしたち、こつそり大広間を抜け出して、庭で泥んこ遊びをしたのよ。あとで父から、そりやあひどくしかられたわ……」

エレナの瞳に陰がさした。思い出しているのだろう。やせしかつた父を、母を、愛に満ちていた生活を。

おれは自分がネズミだつてことが、無性に悔しかつた。おれでは、エレナを幸せにしてはやれない。

「さあ、おしゃべりは終わり！」

元気について、エレナは仕事にかかつた。型紙を作り、布を断つ。ピンクのレースや青い絹の上を、白い指が躍る。銀の針が魔法のように布を縫いあわせ、みるみる美しいドレスが形作られてゆく。おれは糸や針をエレナの手元に運び、糸くずや布の切れ端をまとめた。おれにできることといつたら、それくらいしかなかつたのだ。明け方、ようやくベッドに入ったエレナは、小さな声で「ありがと、フランツ」といった。

「あなたのおかげでとつてもはかどつたわ」

『「めんよエレナ。おれが人間だつたら、もつといこう手伝つてやれるのにな』

おれの鳴き声に答えるよつて、エレナはほほえむ。  
「わたし、どんなにあなたになぐさめられていくかわからぬ。ほんとうにありがとつ。……あなたはわたしから離れていつたりしないわね？　ずっとそばにいてくれるわね？」

\*

\*

魔女に会おう。

おれは朝焼けの道をひた走つた。国一番の魔力を持つと評判の、黒い森の奥深くに住む魔女。銀色が大好きで、銀色のものならなんでも集めているといつ。それならば……。

「あたしの『レクション』に、あんたを？」

銀色の服をまとつた中年の魔女は、おれを一瞥すると、論外といつようつに鼻を鳴らした。さすがに魔女だけあつて、おれの言葉も難なく理解してくれる。

「どうか、おねがいします！」

おれは筋ばつた足にすがりついた。

「たしかに銀色のネズミは珍しいから、気が乗らないわけじゃないんだけどねえ」

魔女はどがつたあいをなでながら、值踏みするよひにおれをながめる。

「いいのかい？ フレクションに加わるひことば、死ぬつて」となんだよ？」

おれはうなずいた。覚悟はできている。どうせネズミの寿命なんて長くて三年だ。惜しくはない。ヒレナのためなら。

ほうつと、魔女は大きく息を吐いた。

「まあいいだらう。で、願いといつのは？」

「ヒレナを王子のお妃にしてください…」

とたん、魔女はしかめ面になる。

「こらネズミ、高望みにもほどがある」  
やつぱりだめか。うなだれたおれに、

「あなたの毛皮なら、低級魔法一回分だね」と、魔女はなぐさめる  
よひにいった。

「低級魔法つて？」

「ドレス姿に変身させる、つて程度かねえ

「それでいいです、ぜひおねがいします！」

舞踏会に出られさえすれば、きっとヒレナは王子の田ごとまる。

「ヒレナはほんとにやさしくてきれいで……貴族の娘だし、資格はあるんです！」

聞かれもしないのにいいのをおれに、魔女はやれやれといった表情で肩をすくめた。

「それでおれは、いつ死ねばいいんですか？」

「舞踏会が終わつたらこへおいで」

「ありがとうござります！」

おれは本心から礼をいった。ヒレナが舞踏会で踊る姿を見てから

死ねるなら、もう思い残すことはない。

魔女はあきれたように手を丸くし、それからするつとおじをなでて、にやっと笑った。

「……あんたには負けたよ。出血大サービスだ。銀の馬車と馬もつけてあげよう」

\*

\*

いよいよ舞踏会の日がやつてきた。

「ふうん、まあまあなんじやない?」

「とりあえずは合格ね」

気がなさそうにこいつてはいるが、姉たちがエレナの縫つたドレスに満足しているのは明らかだつた。姉の青い絹も妹のピンクのレスも、流行の型で、しかも体型をうまくカバーするように縫いあげられている。

「今日はもう休んでいいよ」

母親でさえ、やせし声でいった。エレナはそのことばに一瞬驚いたような表情を浮かべたが、やがてうれしそうに口もとをほころばせた。

「あんたの分も楽しんできてあげるわね」

興奮にほおをそめた姉たちは、いそいそと馬車に乗り込み、城へと出かけていった。

おれはエレナの服のすそをひっぱる。それから魔女が現れる時間だ。

「なあに、フランツ、どつしたの?」

『きみの番だよ、エレナ。今日こそ、きみは幸せをつかむんだ!』  
しかし」とばは通じない。エレナは首をかしげると、にっこりほほえんだ。

「……じつとして、ほら」

するりとおれの首に青いリボンをかける。

「あなたの銀色の毛皮には青いリボンが合ひつて、ずっと思つてたの。縫い物を手伝つてくれたお礼よ。受け取つてくれるでしょ？」

それは青い縄のあまり布で作られた、輝くような光沢のリボンだつた。寝る間もないほど忙しかつたはずなのに、いつのまに作つたんだろう。

おれはなにもいつことができなかつた。ただただ、胸の奥が熱かつた。

「……泣いてるの、フランツ？」

「ネズミ、用意はいいかい？」

そのとき、しわがれ声が響きわたり、一陣の風とともに銀色の魔女が部屋の中央に姿を現した。

「あ、あなたは……？」

驚きのあまり、エレナは目を丸くしてその場に立ちすくんだ。

「あたしゃ黒い森の魔女さ」

あんぐりと口を開けたままのエレナを一瞥して、魔女はうなずいた。

「素材は申し分ないね。さ、早くすませちまおつ」

手にした銀色の杖を、エレナのくたびれた服に当てる。刹那、服は象牙色のつややかな縄のドレスに変わつた。つぎのあたつた上着は真紅のビロードのローブに、鑄びたピンは真珠の髪飾りに。

自分を見おろして絶句しているエレナを満足そうに眺めてから、魔女はおれにも杖を当てた。

「これもサービスだよ。あたしゃ『氣前がいい魔女なんだ』

虹色の霧に視界があおわれ、おれは思わず目を閉じた。

「……フランツ、あなた、フランツなのね？」

おそるおそる目を開けると。

「エレナ」

泣きだしそうな、うるんだ藍色の瞳が正面にあつた。

「……これは夢なのね」

「夢じやないよ」

「いいえ、夢だわ。こんなこと、あるはずがないもの」

エレナがさししめした窓ガラスには、見たことのない青年が映っている。銀色の髪、銀色の瞳。

……これは、おれなのか？

首元に結ばれた青い縄のタイが、ひときわあざやかに白い上着に映えている。

「ありがとうございます、魔女さま」

おれはやつとの思いでそうこつた。

「あんたは御者兼従者だからね。そこんとこわきまえて行動してくれ」

にやにや笑いながら魔女はいい、くぬりと踵を返して部屋を出でいきかけたが。

「いけないいけない、忘れるといひだつた」

エレナの穴のあいた靴に杖を当てる。と、それは輝く銀色の瀟洒な靴になつた。

「十一時になると魔法は解けてしまふから、気をおつけよ。それでは、楽しい夜を！」

\*

\*

白い馬にひかれた銀の馬車は、月光の下、すべるようになに城へと向かう。おれは黙つて馬を走らせ、エレナは窓の外をうつりゆく景色をながめていた。

なにを話していいのかわからなかつた。ことばが通じたなら、話したいことがたくさんあつたはずなのに。エレナにとつても、それは同じだつたろう。

馬車が城に到着した。

大広間はすでに人でいっぱいだつた。色とりどりの晴れ着に身を包んだ男女が、弦楽器の奏でるフルツに合わせて優雅に舞つている。

「……踊らない？」

遠慮がちに、エレナが口を開いた。

「でもおれ、ダンスなんてできないし……」

「わたしに会わせてからだを動かせばいいのよ。さあ

天使のような笑みに、おれは負けた。

黒い森の魔女の魔法も、ダンスの腕前にまでは効果が及んでいないらしい。おれは何度かエレナの足を思いつきり踏んだが、彼女は痛い顔も見せず笑っていた。大広間の端から端まで、おれたちは踊りつづける。华尔ツのようにゆるやかに、時が流れていく。

「のまますと、エレナといれたら……。

頭をよぎるそんな考えを、無理に振り払った。おれは明日には死ぬ。そういう約束なんだ。

「お嬢さん、わたしと踊つていただけませんか？」

ふいに背後で声がした。

振り向くと、背の高いハンサムな青年が立つていた。見るからに高級そうな服をまとい、大きな宝石のはまつた指輪をした手をエレナに差しだす。

「王子よ！」

周囲のざわめきで、おれはその男が舞踏会の主役だと知った。

「喜んで」

おずおずと、だがときめきを声にしのばせて、エレナは応じた。握っていたエレナの手が離れていくのを、おれはどうすることもできなかつた。

大広間の中央に進み出たふたりは、一対の蝶のように優雅に舞つ

た。シャンデリアの輝きも色あせてみえるほどに、エレナの美しさはきわだつていた。

「あれはどこの姫君かしら」

「なんてダンスが上手なの！」

「王子さまを見てよ、うつとりしているわ

ざわめきの波が広間をつつむ。そのなかにあきらめた表情の姉たちと継母の姿を認めて、おれはひそかに溜飲をさげた。

「くやしいけれど、とてもお似合いだわ」

「あたしたちなんか、とてもかなわないわね」

「おれは誇らしく胸を張った。」

みんな、見てくれ。おれはおれのHレナだ。

だが同時に、胸の底から激しい痛みがわきあがつた。

エレナ……。

たまらず、広間の明るさに背を向ける。

彼女の幸せを願つていたはずだ。思にどおりになつたのになつたのになつたのを嘆く、ネズミのフランツ。

どのくらいこうしていただろうか。ふと広間の窓から塔を見ると、時計の針は十一時の少し前を指していた。

「いけねつ！」

もうすぐ魔法が解けてしまつ。

あわてて広間を見わたす。Hレナと王子は壁ぎわで話をしていた。エレナのまおは上気し、ほんのりと赤い。おれはふたりに近づいたものの、声をかけるのをためらつた。

「ずいぶん以前に、伯爵の舞踏会で」一緒に緒したことがあります。庭で泥遊びをしたのを覚えていらっしゃるかしら」

「やつぱり！ そうじやないかと思つていたんですよ」

王子はうれしそうに顔をほこりばせた。

「でもまさか、貴婦人に『ぼくと泥んこ遊びをしませんか』って訊けませんし。困つていたんです」

「ばつが悪そうに髪をかきあげ、真顔になつた。

「またお会いできて光榮です」

「……わたしもです」

Hレナは顔を真っ赤にしてうつむいた。

「お嬢さん、よひしければお名前を」

そのとき。

「オオオ……」

真夜中を告げる鐘の音が、王子の声をかき消した。

さつとエレナが青ざめる。

「わたし……帰らなくては……」

身をひるがえし、エレナは走りだした。

「きみ……！」

追いかけようとした王子を、待ちかまえていた女たちがいっせいに取り囲んだ。

「王子！ 次はわたくしとダンスを……」

「いいえ、わたくしが先ですわ！」

「どうしてくれ、ぼくは彼女を……」

王子の姿は黄色い声の集団にのみこまれた。

\*

十一回目の鐘が終わると、おれたちはみすばらじい服の娘と小さなネズミにもどった。

夢は消えた。

エレナの頬をひとすじの涙が伝つた。

『ごめんよエレナ、おれ……』

「悲しいわけじゃないのよ」

ほんの少し前まで銀の馬車だったカボチャを見やり、エレナは指先で涙をぬぐつた。

「だって、これは夢なんですもの。いつか覚めるものだわ」  
いつのまにか片方だけになってしまった銀の靴を脱ぎ、いとおしそうに抱きしめる。

「この靴だけ残るなんて、ふしぎね」

おれは呆然とした。おれがしたことは、いったいなんだったんだろう？ エレナに夢を、手の届かぬ幸福な幻をかいまみさせただけだったのか？

暗い路地に、ちらちらと雪が舞いはじめた。

「おや、今回は靴だつたんだね」

しわがれ声が響き、つむじ風とともに魔女が姿を現した。

「あたしも年をとつたせいか、最近魔法の精度がおちてねえ。魔法が解けるとき、なにかひとつもどこもどりないものができちまつんだ。ま、その靴は記念にとつておおき」

「……ありがとうございました、魔女さま」

おれは深く頭をさげた。

「これからじつしょに参ります」

「そのことだけじね、あたしゃ急用ができちまつてねえ。すまないが、来るのは明後日にしておくれ」

「でも……」

「おわびに、好きなときに一回だけ人間に変身できる呪文を教えてあげよ」

断る間もなく、おれの耳元に呪文をささやいて、魔女は消えた。呪文はばかばかしいほどに簡単だつたけれど、おれがそれを使うことは、けつしてないだろう。

\*

城の兵士が銀の靴の片方を携えて館にやつてきたのは、翌日の晩のことだった。

「これを落とした娘を探しているのだ」

おれは思わず飛びあがつた。やはり王太子はヒレナを選んでくれたんだ。

「わたしよー！」

「いいえ、わたしよー！」

姉たちが先を争つていいつのぬと、兵士はつぶさつした表情でいつた。

「では証拠に、もう片方の靴を出してくださー」

きつとどの館でも、こんな反応にあつていいのだろう。

「それがその、なくしてしまって……」

「でも、はいてみてぴったりだったら、証拠になるでしょ？」「自信ありげに姉が胸を張る。

「冗談はやめてくれ。あの大足がエレナの靴に合ひわけはないだろう。

おれは全速力でエレナの部屋に走り、戸棚から銀の靴を引きずりだして台所に向かった。

「フランツ？」

不審げな表情でエレナが靴を拾う。

『早く来るんだ、エレナ！』

ときどき立ち止まってエレナがついてくるのを確認しながら、おれは密間へ走った。扉の前で、ちょうど帰りかけた兵士に出会った。エレナは氣後れした様子で身を引きかける。

「あなたもゆうべ舞踏会に？」

兵士の目が、エレナの胸に抱かれた銀の靴に吸いよせられる。

「なんですって！？」

「そんなはずないわ！」

「その娘は館の使用人です！」

継母や姉たちの抗議を無視して、兵士はエレナにもう一方の靴を差しだした。

「これをはいてみてください」

一対になつた銀の靴にエレナの華奢な足がするつとおさまると、兵士のいかつい顔にほつとした笑みが浮かんだ。

「あなただつたのですね」

エレナはためらいがちにうなずいた。

「そうだ、これでいい。

おれはそろそろと居間を出た。おれの役目は、終わったのだ。

\*

「フランツ、フランツ！　出てきてちょうだい、お願ひ……！」

エレナはその晩、何度もおれの名を呼んだ。天井裏で聞きながら、おれはふしきに心が穏やかなのを感じていた。死ぬのが怖くないといえば嘘になる。だがおれは、幸せだった。

そのまま眠つてしまつたらしい。下のかすかな物音で目が覚めた。なにか様子が変だと、けもの直觀が教えた。あわてて壁を伝いおりて、隅にあいた穴から部屋に飛び込む。

火の氣のない部屋の中央に、闇よりも暗い影がそびえたつていた。わずかにさしこむ月光を受けて光るものは……。

短剣だ。

「おまえなんか、あの女たらしが死んだときにはいつでもくべきだつたんだ」

凍えるような低いつぶやきせ。

「お母さま……？」

エレナの震える声が闇を伝う。

継母は無言で短剣を突きだした。

危ない！

おれは影の脚に飛びつき、渾身の力をこめて脛に牙を突きたてた。

「痛いっ！」

悲鳴とともにおれは振り飛ばされ、壁にたたきつけられた。骨が折れる鈍い音。そのまま床にどさりと落ちる。すさまじい痛みに全身が貫かれる。

「お母さま、やめて！」

エレナのおびえた声が闇に響く。

「おまえなんか、おまえなんか……！ 主人の愛を奪つたばかりが、いまた娘たちの幸せも奪おうとするなんて。ゆるせない！」

愛？ 幸せ？ あんたはエレナからすべて奪つたじゃないか。それでもエレナは、あんたのやさしいことばを待つていたのに。？お母さま？ と呼ぶのをやめはしなかつたのに。

「つ……つ……」

エレナのおさえたうめき声が聞こえた。床に倒れ伏すおれの目の

前に、ぽたりと赤い血がしたたり落ちる。

『エレナー！』

おれは必死に手をのばした。と、指先に冷たく滑らかなものが触れた。

縫い針だ。ドレスを縫つているときに、エレナが落としたのだろうか。そのとき、魔女のささやきが耳の底によみがえった。

あまりにも簡単な、変身の呪文。

『好きなひとの名を、三回いうんだよ』

針をしつかり握りしめて、おれは叫んだ。

『エレナ、エレナ、エレナー！』

次の瞬間。

手の中には輝く銀色の剣があった。ずしりと重く、目の前にかかると、からだの奥底から力がわきあがつてくるように思えた。

「おまえは……！？」

突然現れた男に驚いたらしく、母親は一瞬ひるんだ。だがすぐに、嬌声を発しておれに飛びかかってきた。おれは短剣の刃を剣で受け止め、はじき返した。

短剣が母親の手を離れ、床に落ちる。おれは構えた剣を母親の喉元に突きつけ、壁際に追いこむ。母親の顔が恐怖にゆがんだ。

「フランツ、やめて！」

悲鳴にも似た声が、部屋にこだました。振り向くと、エレナが涙をいっぱいにたたえた瞳でこぢらを見つめていた。

「だつてエレナ、こいつは」

「もういいの、いいのよ……」

腕の傷口をおさえながら、エレナはいつた。

「この女をゆるすというのか？ センゼンエレナにひびこじをしたこいつを」

エレナはわずかにほほえんで、うなずいた。

「だつて、お母さまですもの。館においていただかなかつたら、わたしは生きてはいけなかつたわ」

「お人よしすあんな、Hレナ。せみはゆるしても、おれはゆるせない」

Hレナがゆつくりとおれに近づき、剣を握った手に、血で汚れた自分の手を重ねた。

「もう傷つけあつのはいや。いまわたしがお母さまをゆるせば、わたしもお母さまにゆるしてもらえると思うの」「わからない。Hレナがこんな母親にゆるしても、もう必要なんかないはずだ。

それでも、Hレナの涙を見ると、もつまにもできなかつた。おれはゆつくりと剣をおろした。

継母はへなへなと床に座り込む。やがて、騒ぎを聞きつけた姉たちや使用人たちが駆けつけてきた。

もうエレナが傷つけられることはないだろ？

安心したとたんに、今まで忘れていた全身の痛みがよみがえつた。おれはもはや抵抗せず、押し寄せてきた白い闇に意識をゆだねた。

\*

「ネズミ、あんたほんとにバカだねえ」「あきれたような声が頭上から聞こえた。

「……魔女さま」

うつすら目を開けると、にじんだ視界に金色の服をまとった魔女が映つた。

「Hレナは？」

「無事だよ。城からお召しがあつてね。あんたのことをひどく心配していたけど、あたしがついてるからついて行かせたんだ。それでよかつたんだろ？」

おれはうなずき、からだを起こした。まだ人間の姿をしているのを不思議に思うと同時に、どこにも痛みがないのに気づいて驚いた。

おれは魔女を見た。

「治してくださいたんですか？ ビーチ明田には死ぬの……」

「それがねえ」

魔女はぽりぽりと頭をかいた。

「急に、銀色より金色のほうが好きになつちまつてね。あんたには用がなくなつたのさ」

「はあ？ そんな……。おれの決心はどうなるんです？」

「知るもんかね。あたしゃ気まぐれな魔女なんだ」

腕に巻きつけた金色の鎖をじゅらじゅらと鳴らして、魔女はにやつと笑つた。

「おわびといつちやなんだが、ひとつだけ願いをかなえてあげよう。どうだね？ こまま人間の姿でいたいんじゃないのかい？」

「オオオン……。遠くで鳴つているのは十一時の鐘だろ？ うか。

「あの鐘が終わつたら、おれはネズミにもどるんですか？」

「そうだよ」

「じゃあ……お願いします。どうかおれを……」

\*

街中の鐘がいっせいに鳴りはじめた。祝福の鐘だ。こまいる城は、嵐のような拍手と歓声に包まれてゐることだらう。

「父ちゃん、あたいも王子さまの結婚式を見たいよ。なあ父ちゃん！」

幼い娘がせがむ。

「んなもん見たつてしょがねえ。わしらとは違う世界のことだからな」

父親は答え、馬に容赦なく箇を入れた。ガタン、と荷馬車が動きだした。

「ねえあなた、旅のお仲間？」

山と積まれた荷物のあいだから、茶色い頭がひょつこり顔を出す。

黒い瞳がかわいらしい、魅力的な娘だ。

「ああ、そのようだな。よろしく」

まんざらでもなく、おれはこつこつする。

「あら、その青いリボン……。あなた、お触れ書きの？尋ねネズミ？じゃないの？　お城の花嫁が探してゐていう銀ネズミ」

「よく見ろよ」

おれは茶色ネズミにむかって、むつとした表情をつくつてみせた。

「尋ねネズミは銀色、おれは黒。ぜんぜん違うだろ？」

「そういえば、そうね」

おれはあのとき、魔女に頼んだ。からだの色を変えてくれ、と。おれはこれから、ただのネズミとして生きるんだ。ネズミと恋をして、ネズミの子をもうける。そして年をとる。ときおり胸の古傷がつづく日には、孫たちに昔語りをすることもあるだらう。若き日の武勇伝と、美しい王妃を救つた銀色の剣の話を。

『あの剣は、もともとは針だつたんだよ』

銀色の靴と同様、魔法が解けずに残つた剣は、あのまま館においてきた。ヒレナはきっと、おれの形見として大切にしてくれるに違いない。

おれは荷台にあおむけになつた。

「いい天氣だな。おれはフランス。きみは？」

「モニカよ。ほんと、いい旅立ち日和よね？」

茶色ネズミがとなりに座つた。

「ああ。そしていい結婚式日和だ」

青い青い空に、白い雲がぽつかりと浮かんでいる。

鐘が鳴つている。いつまでも、いつまでも。

鳴りやまぬ祝福の鐘を聞きながら、おれは目を閉じて、あたたかな口差しを全身で受けとめていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0199v/>

---

鳴りやまぬ鐘を聴きながら

2011年10月9日11時49分発行